AGC レポート
山岳地理クラブ会報

VOL　７８
発行 2022 年 3 月 25 日
公益社団法人 日本山岳会
山岳地理クラブ
URL●www.jac.or.jp/doukoukai
越境する山と渓(4) ／八王子滝山城跡散策

シリーズ　分水嶺を越える県境・市町村境

# ―越境する山と渓―（4） 足尾

富永 滋

群馬県と栃木県の県境は、桐生、足利以南の関東平野やその山裾で複雑に入り組んでいるものの、山間部では福島県と接する黒岩山付近に至るまで、鬼怒川水系の分水嶺が県境となっている。渡良瀬川は、県境付近を流れる下流で群馬と栃木を行ったり来たりするが、中流域では群馬県内を流れるようになる。だが渡良瀬川の名が消え、神子内川、松木川、庚申川に分かれる上流部は、分水嶺を越えて栃木県に含まれている。銅山で有名な旧足尾町（現在は日光市の一部）の領域がそれに当たる。水系では明らかに大間々を流れる渡良瀬川の奥地であり、森林も同様に旧大間々営林署（現・群馬森林管理署大間々事務所）の管内である。また足尾銅山で生産された製品は、渡良瀬川に沿って足尾鉄道（後の国鉄足尾線、わたらせ渓谷鉄道）で搬出されていた。それにも関わらず、行政上は栃木県に属している。

江戸時代の上野・下野国境を見ると、桐生付近から桐生川の川切りで北へ向かい、安蘇山塊の根本山で尾根に上がる。ちなみに現在の県境はこの一帯で非常に特殊な付き方になっていて、桐生川左岸の小尾根や山腹を縫うように走っている。詳細な理由は不明だが、菱村の栃木県から群馬県への移籍、栃木県（旧）飛駒村と群馬県（旧）梅田村の曖昧だった境界の確定、そして根本山神社の奥宮が置かれた根本山への飛駒村からの参路が付

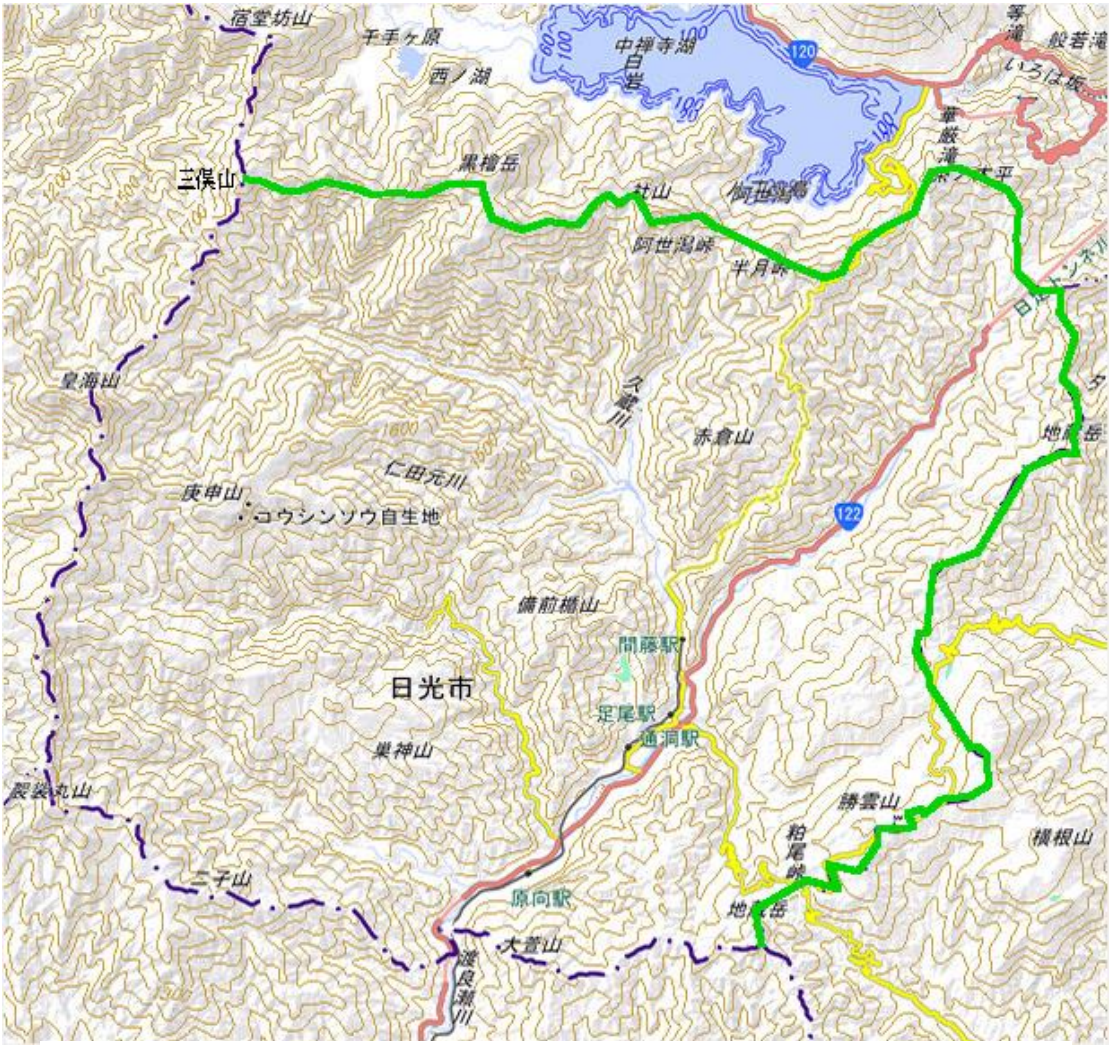



図１　足尾付近の県境（紫一点鎖線）と渡良瀬・鬼怒分水界（緑線、県境と異なる部分のみ）
出典：国土地理院 地理院地図

近を通過していたことなど、いくつかの理由が重なり理解不能な県境が引かれたようだ。さて国境は氷室山、地蔵岳と安蘇山塊を北上するが、ここで急に渡良瀬川へ下り、右岸の支尾根に取り付いて袈裟丸山へ向かっている。そこから北上して皇海山を越え、三俣山で鬼怒川・渡良瀬川の分水嶺に戻るのである。

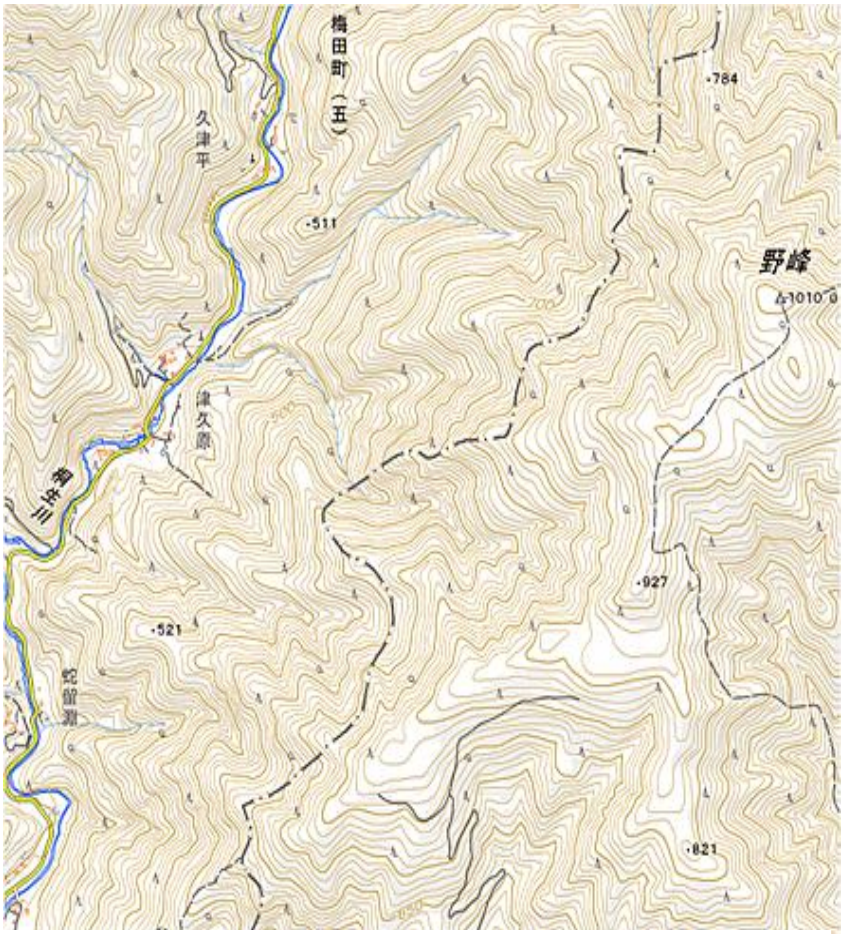



図２ 旧梅田村（群馬県）・旧飛駒村（栃木県）の不可解な境界
出典：国土地理院 地理院地図

銅山発展前は恐らく山深い寒村であった足尾については、それ以前の歴史的な資料が極めて少ない。資料が存在する時点で既に下野国（およそ現在の栃木県に相当）に属していたため、なぜ下野国に属することになったかを明記した資料が、見つからなかった。しかし僅かに集めることができた史実から、以下のように経緯が推測された。

毛野（ケヌ）と呼ばれていた北関東の一帯は、律令時代の５～７世紀頃に二つに分割されたという。毛野の名は今も「鬼怒川」の名に残っている。分かれた一方が「上つ毛野（カミツケヌ）」、もう一方が「下つ毛野（シモツケヌ）」、さらに「毛」の字が落ち、「野」が音が消えて、「上野（カミツケ）」「下野（シモツケ）」になったようだ。足尾は、大化元年（645）に安蘇郡足尾郷として記録されるも、その時点で毛野が分割されていたのか、また分割されていたなら上つ毛野、下つ毛野のどちらに属したかは不明である。なお平成十七年まで栃木県に存在した安蘇郡は古代の安蘇郡と完全に同じものではないので、当時の足尾の帰属を推測する根拠にはできない。毛野（ケヌ）の分割によって下野に属することになった足尾地域は、地理的な見方をするなら、鬼怒川との分水嶺が比較的低く緩やかで、しかも渡良瀬川までの距離が短く、鹿沼や日光からの到達が容易であった。さらに安蘇山塊から日光にかけての各山で山岳宗教が興隆し、下野側からの入山動機も豊富であった。一方群馬側からは、渡良瀬川に沿って長い道のりを遡る必要があった。そのため、足尾が下野に属することは、むしろ必然であったとも考えられる。

毛野の分割により日光一帯は下野の一部となり、それが足尾の行方に大きな影響を及ぼしたと考えられる。天平神護二年（766）に勝道上人により、霊峰男体山の麓に四本龍寺、中禅寺の祖となる神宮寺などが創建されたことが、日光の起源である。それに続いて多くの僧侶や修験者が入山し、多数の堂社を備えるようになった。全盛期には多くの信者を集めた足尾の猿田彦神社もまた、庚申山を霊山として勝道上人により神護景雲年間（767～770）に開かれたとされる。延暦九年（790）年には、足尾は日光中禅寺の神領とされた。以後日光は五百余坊を抱える一大霊場となり、有力な豪族壬生氏が別当（寺院の長）を務め、足尾、藤原、栗山、鹿沼、宇都宮に及ぶ広範囲を領有するに至った。武家と別当を兼任した壬生氏の領地として、足尾は紛れもなく下野の一部となったのである。天正十八年（1590）、壬生氏は豊臣秀吉に破れ滅亡したが、日光の門前町と足尾だけが寺社領として残されたことからも、日光との特別な結び付きが伺われる。

徳川の時代になると、幕府の庇護下で日光は力を取り戻した。前後して足尾銅山が発見された。銅山は一時期東照宮の管理下に置かれ、幕府直営の時代を経て、明治になると日光県が経営に当たるなど、日光と足尾は単なる行政区分以上の関係が続いた。明治十年（1877）、民営化により古河市兵衛（現・古河機械金属）が銅山経営を開始し、事業拡大に伴い明治三十九年（1906）に日光電気精銅所が開設された。足尾から運んだ鉱石を日光で精銅したのである。鉱山からの距離的な近さに加え、国鉄日光線により製品搬出が容易であったことが、日光が選ばれた理由であった。鉱山から精銅所への私設軌道による鉱石輸送では、細尾峠越えの区間は索道に積み替えて行っていた。そのため人が行き交う大きな交流には至らなかったものと思われる。峠越えの索道が輸送の主力として活躍したのは、大正三年（1914）の足尾鉄道全通までの短い期間だった。

一方製品搬出には、渡良瀬川のルートも使われていた。慶安二年（1649）には江戸幕府により銅（アカガネ）街道が整備され、製品は平塚（現・伊勢崎市、後に前島（現・太田市）に変更）の河岸から利根川の水運で輸送された。恐らくこの頃から群馬側との交流が大きくなったと考えられる。大正時代、足尾に鉄道が入ると大部分の人流・物流が鉄道頼みになり、群馬県の一部に組み込まれたかのような立ち位置になっていったのだろう。しかし昭和五十三年（1978）の日足トンネル開通より、現在では東京から伊勢崎経由に比べ日光経由の方が時間的には早く着くという逆転現象が生じ、日光からの銅山観光も知られる様になってきた。歴史は何度でも繰り返している。

行ってきました

# 「八王子滝山城跡・高月城跡散策」

鎌田正彦

実施日　：　２０２１年１２月１８日（土）
集合場所・時間　：　JR 八王子駅改札口前　9 時 30 分
出発時間　：　9時45分　八王子駅北口１２番バス乗り場　「東京サマーランド」行き
参加者　：　今井、近藤、渡辺、熊谷、鎌田　計５名

コース

滝山城大手口（１０：００）―小宮曲輪・山の神曲輪―三の丸―千畳敷―二の丸下大馬出・行き止まりの曲輪　―家臣屋敷―二の丸―中ノ丸・昼食―本丸―本丸南虎口（１３：４０）―高月のクワ記念碑―高月の田園・多摩川・秋川右岸―東秋川橋―高月城跡（１４：２０）―高月バス停（１４：４６）―JR 拝島駅―反省会・解散（１７：００）

報告

東京都八王子市の加住北丘陵（標高 160m）の尾根に築城された滝山城跡と高月城跡を散策した。ともに北側を流れる多摩川と秋川の急峻な河岸段丘や複雑な谷戸の地形を巧みに利用して構築された中世の山城である。とりわけ滝山城は 1521 年に武蔵守護代の大石定重氏が築城しその後城主となった北条氏照が改修、拡張し屈指の堅城となった。今年で築 500 年になる国指定史跡である。

朝は３℃以下まで冷え込んだものの、メンバー全員が予定時間よりも早く集まり、１本前の９：２５分発「戸吹」行きバスに乗り込んだ。滝山城跡下バス停で下車し大手口を登り始めた時、グリーンの帽子に旗竿らしきものを持った男性から「滝山城ですか、案内しましょうか」と声をかけられた。話を伺うと滝山城跡のボランテイアガイドさんとのこと、早速お願いし中の丸までの３時間詳しいお話を聞かせて頂くことができた。（写真 1）

天野坂の急坂を登ると左に小宮曲輪の高い土塁とその下の深い空堀、右には三の丸曲輪の土塁が目に入った。道は直角に曲がりその先には枡形虎口（直角に曲がって敵の直進を阻む狭い出入り口）や馬出（虎口の前に敵兵を誘導して攻撃・防御する広場）等の仕掛が設けられており、戦いの際には両側の曲輪から城兵の弓矢、槍、鉄砲による攻撃を受け本丸への侵攻が困難な構造になっている。１０分も登ると山の神曲輪方面への分岐点に着いた。左に折れて細い山道に入ると左側に北条氏照氏の家臣である小宮氏の平坦で広大な屋敷跡・小宮曲輪が広がっている。右側には城内弁天池の深い崖が続いており、さらにその右奥に入って行くと「絶対防御ライン」と言われている土塁や空堀を整然と配置した空間を見ることができた。山道に戻ると小宮曲輪の北端に着いた。そこは小宮曲輪下の空堀の底道で狭い枡形虎口が設けられ、城の北西方面の強固な備えになっている。さらに曲がりくねった山道を 10 分程度進むと山の神曲輪に到着した。この曲輪は戦いの際に城下の民衆を守るための避難場所として使用されていた。道はここで行き止まりになっている。多摩川の向こうには埼玉狭山丘陵・所沢球場まで展望が開けており、高さ 70m の断崖の下には高月町の滝集落や田園が広がっている。（写真 2）

小休止して来た道を小宮曲輪の北端まで引返し空堀の底道を歩いた。下から見上げる小宮曲輪の土塁は急峻な崖になっている。上から城兵の攻撃を受けながら腰に刀を差し、手に槍を持ってこの壁をよじ登るのは到底不可能ではないかと思われた。分岐点まで戻り本丸方面への広い石畳の道に出てすぐに右側の三の丸に登った。高さ 10m 程の平坦な曲輪は三方が深い空堀に囲まれていた。三の丸からコの字型土橋を進むと左手に千畳敷がある。角馬出から中に入ると城内で最も広い草原になっていた。当時住民からの要望を受け付けるなど役所的な場所であった。正面の崖に立つと遙か下に弁天池跡が見える。小舟を浮かべて優雅な宴を楽しんだ池だったと言われている。道路を挟んだ右前方に二の丸が見える。二の丸は三カ所の虎口とそれぞれに馬出を備え、中の丸、本丸を守る最も防御性に優れた曲輪である。南側には深さ１５m に及ぶ空堀が続きその下は鍛冶谷戸の深い谷に落ち込んでいる。その先には大馬出や行き止まりの曲輪が設けられており、狭い土橋を１列縦隊で侵入してきた敵兵は袋のねずみ同然となり上方から、左右から一斉に攻撃を受ける仕掛けになっている。二の丸から先の一段高い広場には中の丸がある。本丸に次いで重要な施設とされ現在この場所には昭和の時代に国民宿舎として使用された旧滝山荘が残っている。展望の良い広場には休憩用のテーブル、トイレの施設が有りここでガイドさんと別れ昼食をとった。（写真 3）

北側の山腹には多くの腰曲輪が備えられ多摩川方面に対して強く警戒していたことがうかがえる。城の最も北側にある本丸への出入り口は中の丸との間に架けられた木橋（引き橋）を渡って入る枡形虎口と、南側に設けられた枡形虎口、さらに北側の一段高い位置に設けられた枡形虎口があり本丸の守りを固めている。特に木橋は１０ｍを超える深い大堀切の上に架けられており、中の丸に敵が押し寄せてきた場合には引き落として簡単には本丸に攻め込めない仕組みになっている。本丸は城主北条氏照の住居があったとされ当時の大きな井戸が残っている。（写真 4）

１５６９年北関東への進撃を狙う甲斐の武田信玄２万の軍勢に対しわずか２千の兵で城を守っている。如何に堅強な城であったかがうかがえる。１３：４０分本丸南側の枡形虎口から石畳の城道に出た。木橋の下の大堀切を通過し北斜面の急坂を下り高月町滝集落に着いた。（写真 5）

高月町は滝山城、高月城の城下町であり、室町時代の昔から自生の桑を育て絹織物を生産していた。現在八王子市は「桑

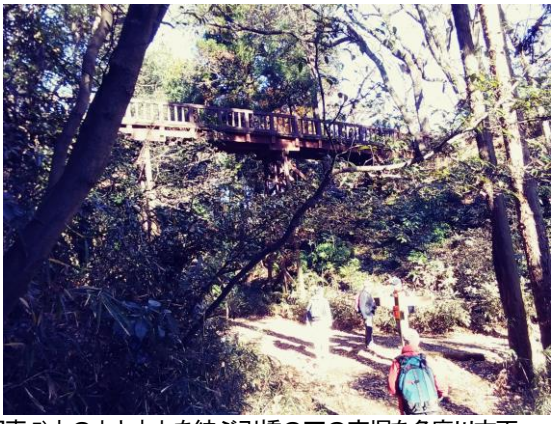
都」として広く知られている。滝集落には八王子市指定天然物としての「高月のクワ」の記念碑があった。滝集落から高月町の田園を横切り多摩川右岸の土手を歩いた。前方には広い田園の向こうに高月城跡の小高い丘陵が、後方には滝山城跡の東西に長い丘陵が続いていた。秋川右岸の土手に出て１０分も歩くと東秋川橋、谷野街道を経てすぐ前方の小高い山に高月城跡があった。この城は滝山城よりも約６０年前の１４５８年に大石顕重氏によって築かれたものである。秋川の半円弧状の流れに沿って突き出た加住北丘陵の河岸段丘を利用した戦国時代初期の山城であり、後の滝山城のルーツになったと言われている。城への道は幅５０ｃｍ程の細く急な山道で５分もすると山頂の広い本丸に着いた。途中わずかに土塁や曲輪の跡らしき所が有るものの私有地で藪化しており立ち入ることはできなかった。本丸の周辺や山腹にも虎口や馬出、空堀、腰曲輪等が有ったとされるが確認できなかった。本丸から見下ろすと急峻な崖の下に秋川とその河川敷が見えた。一見何もない普通の山に見えた加住北丘陵、多摩川・秋川、その自然の地形を巧く生かし構築された滝山城・高月城を見てきた。ガイドさんの丁寧な説明を聞くにつれ素晴らしい「土の城」のイメージが湧いてきて非常に感動した１日であった。予定より３０分早く高月バス停に到着。急遽八王子駅北口への予定を変更し１４：４６分発 JR 拝島駅行きバスに乗車。駅前食堂で反省会、１７：００分現地解散した。

(写真 1) ボランテイアガイドさんの案内で城跡内を歩く

(写真 2) 山の神曲輪からの北方の展望

(写真 3)中丸の旧滝山荘前広場

(写真 4)本丸の井戸跡



(写真 5)中の丸と本丸を結ぶ引橋の下の空堀を多摩川方面へ

AGC レポート　vol-78　2022 年 3 月 25 日発行
発行：公益社団法人　日本山岳会　山岳地理クラブ
〒102-0081 東京都千代田区四番町 5-4 日本山岳会　気付
TEL　03-3261-4433　　FAX　03-3261-4441
編集担当：近藤　　E-mail：yoshi-kondo@jcom.home.ne.jp